創立 15 周年記念
新春講演会

辻本信一

今年度の「新春講演会」は、当会創立 15 周年の記念イベント「夢・未来を語る集い」の前段として、下記要領にて実施いたしました。

日　時：平成 29 年 1 月 22 日（日）
　　午前 10 時～午前 11 時 30 分
場　所：奈良ロイヤルホテル・鳳凰の間
演　題：「父は空　母は大地　先住民の思想」
聴講者：66 名
講　師：寮美千子氏（作家・詩人）
（講師略歴は、会報 1 月号行事案内を参照）

【講師:寮美千子氏】　【熱心に聞き入る参加者】

冒頭、鈴木会長のご挨拶と講師紹介。

講演要旨：

・幼少時より人間について根源的な事を考えてしまう子供だった。その答えを探求すべく「科学」や「神話」・「民俗学」の道に足を踏み入れた。

・1992 年アジアン・カルチュラル・カウンシルの芸術交流プログラムでアメリカに 2 か月留学。アメリカの最先端科学見分と最も古い文化に触れることをテーマとし、毛利さん搭乗のロケット打ち上げ取材、アメリカインディアンの居住地も訪ねた。

・ホッキ族の居住地では、農作業より自然にゆだね任せる生き方を学んだ。母なる大地を汚すウラン採掘に抗議する裸足のアースランニングも知った。

・アメリカに対し留学のお返しを、と思った時アメリカ先住民シアトル首長の Chief Seattle speech に出会い、日本で絵本にすることを思い立った。このスピーチは 1854 年条約を結び土地を手放し、居住地に移り住むことになった時首長シアトルがアメリカ大統領に対し訴えたもの。先住民の世界観、大地との付き合い方がよく表されている。数多いバージョンの中から人間と大地に関わる根源的な言葉をピックアップし切り貼りし仕上げた。

・絵本「父は空　母は大地」を朗読。
（アメリカ先住民の音楽をバックに、自然を大切に思い生きるアメリカ先住民の姿を語る寮講師の澄んだ言葉は、強く我々の心を打ちました。）

・日本帰国後、北海道でもこのような本を書いてもらいたいとの依頼を受け、絵本「おおかみのこがはしってきて」（北の大地の物語）を著した。

・オオカミの子が走って来て、氷の上で転んだのを見た男の子が、お父さんになぜ転んだのかを尋ねる。お父さんは自然の中での強い物、弱い物の話をし、自然の営みは循環していることを教える。最後に大地が一番偉く、そこから色々なものが生まれ、生れて来たものはみんな兄弟だと教える。

・第 2 弾として「イオマンテ」執筆。 冬眠中の熊の親子を狩るアイヌの熊猟。母熊は獲物にするが、子熊は連れ帰り、カムイ（神）の国からの賓客として大切に育てる。一・二年後、大きく育った子熊をカムイの国にいる母熊のもとに送り返す。「送る」とは、実際には、熊の命を奪うこと。少年は、子熊との別れのつらさのなかで、命の重さと尊さを痛いほど感じる。そして、「わたしたちは誰かの命をもらって生きている、生かされている」ということを学ぶ。

・アイヌの人たちは自然に感謝し、奪い過ぎないこと、過剰なことをすれば必ずしっぺ返しが来るということを長い歴史の中で体感して知っている。現代人はすべての面で規模が大きくなり過ぎた。自然との共生が如何に大事かを訴えたい。先住民族アイヌの深い知恵に学ぶべきことが沢山あった。

・自然との共生が何より大事。それにつけても自然を野放しにということではない、里山と言うものは純粋な自然ではなく、自然に手を加えられたものではあるが、その中で多様な生物が息づき、豊かな生態系が築かれている。

・ならやまの皆さんの里山保全の活動は素晴らしいものとして共感している。今後若い人たちにもしっかりと伝えてもらいたい。